Event Report

建築が熱い街、大阪 若手建築家の登竜門となる展覧会開催

2025年10月、これからの建築を担う世代が集い、その可能性を社会に提示する場「U-35」が開催されました。本展は、建築家を目指す若手にとって大きな登竜門とされています。山下PMCは本展の趣旨に賛同し、4年連続で特別協賛をしています。本年の審査委員長を務めたのは、建築家・藤本壮介さん。出展者には7組の若手建築家が選ばれました。シンポジウムーでは、冒頭で山下PMC代表取締役社長・丸山優子が登壇し、挨拶しました。

「出展者の皆さん、本日は本当におめでとうございます。先日、大阪関西万博の閉会式に行ってまいりました。会場整備事業のPMとして仕事をしてきた立場から、あの大屋根リングが何を象徴し、何を意味しているのかが国民全体に伝わったということを実感し、本当にうれしく思いました。もしかしたら、建築は社会の資産として使われていく中で形が変化するか



次世代を担う35歳以下の建築家による建築の展覧会
「Under 35 Architects exhibition」の開催が、16回目を迎えました。
今年は従来のゴールドメダル賞に加え、シルバーメダル賞も新設されました。
2回にわたって行われたシンポジウムの様子をレポートします。

もしれません。いつか滅びてしまうかもしれません。しかしながら、建築家の思想は次世代の記憶に残り、引き継がれます。

ぜひ若い建築家の方々にも、それを使う人たちや社会に伝わっていくような思想を形にしていくことを目指していただきたいです。また、そんな若い人たちの活動を、私自身も建築ファンの一人として見守り続けていきたいと思っています」

シンポジウムI

ゲスト 建築家・建築史家 紹介



審査委員長

建築家
藤本壮介



建築家
芦澤竜一



建築家
五十嵐淳



建築史家
倉方俊輔



建築家
永山祐子



建築家
平田晃久



建築家
平沼孝啓



建築家
吉村靖孝



建築史・批評家
五十嵐太郎

山下PMC 社長・丸山優子もシンポジウム冒頭に登壇し、若手建築家にエールを送った。



展覧会場はうめきたシップホール2階。入り口には受賞者に授与されるメダルや表彰状が飾られ、多くの見学者が見入っていた。







1


2


3

斬新で画期的な展示手法に上世代のゲスト建築家が戸惑い

今年のテーマは「既知より、未知。」。出展者7組の平均年齢は20代後半と、例年より若い出展者での構成となり、従来の枠組みにとらわれない建築の可能性の探求が印象的でした。若手建築家たちは、図面・模型・映像を用いて「未知」への挑戦を表現。都市空間の再解釈や環境との共生など、現代的課題へのアプローチが目立ちました。

展覧会場は建築を学ぶ学生、建築業界に従事する社会人、建築ファンで常に混雑し、16回目を迎えるこの展覧会が梅田の街にすっかり根付いてきた様子がうかがえました。

ゴールドメダリストを審議するシンポジウムでは、若手建築家のプレゼンテーションに続き、9名のゲスト建築家が講評。建築家としての成長や社会との関わり方についての質問が投げかけられるなど、建築界の未来を担う若手とその育成を担う上世代が真剣に向き合う場となりました。緊張感が漂う中、若手建築家の斬新な回答

2025年のテーマ

既知より、未知。
known, more unknown.











1.出展者によるプレゼンテーションと講評は、シンポジウムの核。会場にいた誰もが展開を見守った。2.シンポジウム前にはゲスト建築家が展覧会場を訪れ、出展者から直接作品の説明を受けた。3.丸山（左）も展覧会場に駆け付け、じっくり作品に見入った。4〜6.世代間ギャップを認識しながら、疑問を投げかけるゲスト建築家。中でも、例年にない出展方法を取った成定由香沙さん（4）と上野辰太朗さん（5）に質問が集中した。7.2025年の審査委員長は藤本壮介さん（写真中央）。シンポジウムの最後に、審査発表とメダルの授与を行った。ゲスト建築家による鋭い質問にも丁寧に答える出展者が多かった。8.10月25日に行われたシンポジウムⅡでは、ゲストジュアラーとして丸山優子が再登壇。壇上では建築家として活躍する歴代ゴールドメダル受賞者と出展者たちの会話に耳を傾けた。また、PMとしての丸山の意見を述べるシーンでは、多くの聴講者が真剣なまなざしを向けた。

シンポジウムⅡ

ゲスト建築家
（歴代ゴールドメダル受賞者）紹介



新設されたシルバーメダル賞を審査するのは、歴代ゴールドメダルを受賞した建築家たち。右から順に、酒井亮憲（2016）、三井嶺（2017）、佐々木慧（2022）、Aleksandra Kovaleva＋佐藤敬（2023）、小田切駿＋瀬尾憲司＋渡辺瑞帆（2024）。一世代上の建築家と出展者の中間世代として、新たな目線で作品を審査・評価した。

※（　）内はゴールドメダル受賞年

にゲスト建築家がその場で熟考する場面もあり、会場内に笑いが広がることもありました。

約4時間のシンポジウムを経てゴールドメダリストに輝いたのは、田代夢々さんです。

審査委員長の藤本さんは、地域性や社会的背景を読み解きながら、建築が人々の生活にどう寄り添うかを探る田代さんの姿勢を高く評価しました。「空間の可能性を詩的に広げる力がある」とコメントし、今後の活躍に大きな期待を寄せました。

出展者・展示作品紹介



ゴールド
メダリスト

田代夢々

1995年生
Ateliers Mumu Tashiro

次なる時代精神を表す
人間的な家を目指して

「現代の家のベースは、１世紀以上前に提案された“住むための機械”からさほど発展していません。今回は、何十年もかけて柔軟に形を変えながら進化していく“人間的な家”を提案しました。私自身の家をモデルに、新しい建築の原則を再発見する試みです」



ゴールドメダルを受賞して

「学生時代から『君のやりたいこととやっていることは、何か違うんじゃない？』と言われてきた私が、憧れの藤本壮介さんからゴールドメダルを頂き、大きな励みになります。『このまま行っていいよ』と背中を押していただいたようで、とてもうれしく思います」



シルバーメダルを受賞して

「シンポジウムを通して、自分の準備・経験不足を感じ、建築に携わる者としてもたくさん課題が見つかりましたが、ここ数日で作品ともう一度しっかり向き合う時間が取れました。この分かりづらい作品を皆さまが丁寧に読み解いてくださり、ありがとうございました」



シルバー
メダリスト

成定由香沙

1998年生

「母の部屋がない」に
端を発した、家の行き先

「私の実家には、母の部屋がありませんでした。また、母はある日『いつでも引っ越せるように』と家中を整頓しました。私は不思議な感覚を覚え、わが家の『改修』と家の再構成を意味する『引っ越し』という2つの世界観から、わが家の行く先を思考しました」

若手建築家と中間建築家によるクロストーク

今回は1週間後のシンポジウムIIで初のシルバーメダリストが選出されました。第2部に、丸山優子がゲストジュアラーとして登壇。倉方俊輔さん、平沼孝啓さんが進行役を務められました。当日ゲスト建築家として集まったのは歴代のゴールドメダル受賞者5組。ストレートな言葉で深い議論を展開。その堂々たる雄姿を見た平沼さんが「貫禄がある」と発言して会場の雰囲気が和みました。丸山が、建築が単なる空間づくりではなく地域や人々の未来に影響を与える力を持っていることや若手に必要な「俯瞰力」や「対話力」についてアドバイスすると壇上の建築家たちが大きくうなずいていました。

倉方さんが「今年は内的リアリティを出発点にして信頼できる表現手法を使い、率直な作品が多い」と総括。審議の結果、成定由香沙さんがシルバーメダルを受賞。女性2人によるダブル受賞となり、『既知より、未知。』のテーマを体現する開催となりました。



広大で緩やかな大地に立つ画家の家

「開放的で未完成、動的で多様。そんな浜辺のような建築を再現したのが『斜めの家』です。いくつかのレベルの上で人は立ち、斜めにそっと包み込まれて、生は育まれる。画家とその家族が自由に行き来しながら自由に暮らす家を、4分の1で再現しました」



工藤希久枝+工藤浩平
1994年生、1996年生
KKALA



上野辰太朗
1996年生

建築を取り巻く未決定の風景を観察

「現代の都市は極めて合理的でありながら、どこか現実から切り離されて存在しています。今回は、建築における都市の未決定の現象を美的に受け入れるための装置として、都市を覆い尽くすアスファルトとそこから未決定に生える草花をモデルとして展示しました」





誰でも立ち入ることのできる場所をつくる

「大阪で生まれ、岸和田に事務所がある私たちは、どんなプロジェクトでも、大阪の歴史や街の文脈に接続しながら、誰でも立ち入ることができる公共性を持った建築をつくってきました。その繰り返しの先に、大阪らしい建築と街の風景が立ち上がると信じています」



上田満盛+大坪良樹
1991年生、1992年生
ueo一級建築士事務所



石田雄琉+房川修英
1999年生、1997年生
Brain Sauce Studio

見る人の想像力で新しい経験を目指す

「京都府舞鶴市で設計した2棟のホテルは、日本海へつながる伊佐津川に面していることから、周囲の風景を意識した設計となりました。“建築単体では捉えきれない周りの風景を含めた体験”を、写真や図面だけで表現することに挑戦しています」





言葉と物を組み立て、いったりきたり

「どこまでが言葉が及ぶ領域で、どこからが物の領域なのか。私は建築をつくるときはいつも、言葉を並べたり模型や図面を描いたり、その間を行き来しながら組み立てる作業をしています。すると、今度は住んだ人が、建てられた物と言葉の関係をつくり始めるのです」



下田直彦
1989年生
カナバカリズ